

いのち
生命のにぎわいとつながり

No. 75

令和4年9月

鳥は、人間の誰しもが夢に見、しかし叶えることのできない、「自分の翼で空を飛んで移動する」ことができる生き物です。そして、中には海を渡り国境を越え、長い旅をするものたちがいます。今号では、そうして千葉にやってくる、都会でも観察できる冬の小鳥たちの世界をご案内します。

都会で見られる冬の小鳥たち



ジョウビタキ♂ (左上)、ツグミ (右上)、マヒワ♀ (左下)、アトリ♀ (右下)

冬は、野鳥観察にぴったりの季節です。温和な気候の房総半島には、たくさんの冬鳥たちがやってきます。彼らの存在は、千葉の生態系が世界とつながっていることの特徴でもあります。私たちが公園や庭でも出会うことのできる、身近な冬の小鳥たちの中から、ジョウビタキ、ツグミ、マヒワ、アトリの4種を例に、その「鳥となり」と、私たちとのつながりについてみていきましょう。

CONTENTS

| | |
|-------------------------------|---|
| 1 都会で見られる冬の小鳥たち | 1 |
| 2 生命のにぎわい調査団の現地研修会を開催しました | 3 |
| 3 生物多様性センターのホームページをリニューアルしました | 4 |
| 4 千葉県の外来種（イッカククモガニ） | 4 |

◎ジョウビタキ *Phoenicurus auroreus*

ヒタキ科 スズメより少し小さい

電線や木の枝のような高いところにとまり、「ヒッヒッカッカッ」と聴こえる、よく通る声で鳴く姿が特徴的なジョウビタキは、美しくて人気の高い鳥です。

漢字で書くと「尉鷓」。「尉」というのは昔の中国の官名で、そこから転じて「老人」を指すのだとか。ではなぜこの鳥が老人と結びつけられるのかというと、雄の頭が黒地に白銀色で、白髪のように見えるから…なのだそうです。しかし、雌の方は茶褐色で、あまり老人っぽくは見えませんね。



ジョウビタキの♂(左)と♀(右)

ジョウビタキは縄張り意識が強く、気性の激しい鳥です。目立つ場所で鳴いているのも、その主張のためです。例えば庭などでジョウビタキが鳴くようになったら、それは、この庭は自分のものだとアピールしているのです。

◎ツグミ *Turdus eunomus*

ヒタキ科 ムクドリくらい

ツグミは、日本の野鳥の中でも非常によく知られた鳥であり、代表的な冬鳥のひとつでしょう。雌雄ほぼ同色で、同じくらいのサイズのムクドリなどと比べるとスマートな体形をしています。農耕地や公園のような開けた環境を好む鳥で、渡ってきた当初は樹上で木の実を食べていることが多いのですが、年が明ける頃になると地上を走り回って虫やミミズなどを食べるようになります。毎年、芝生の上などでツグミを見かける機会が増えてくると、「この冬もうじき終わりなんだな」という感じがしてきます。

このツグミは、かつては肉が美味な鳥としても知られ、かすみ網を用いて大量に捕獲されてきた歴史があります。無論、現在ではかすみ網の使用、ツグミの捕獲ともに法律で厳しく禁じられていることは言うまでもありません。そっと見守ってあげてくださいね。



樹上のツグミ

◎マヒワ *Carduelis spinus*

アトリ科 スズメより少し小さい

マヒワは漢字だと「真鷓」と書きます。「鷓色」という色があり、黄色寄りの黄緑色というか、緑みの強めな黄色のような色で、このマヒワの雄の体色を模したものとされています。鎌倉時代には既に、武士の礼服として「鷓色」の狩衣が用いられていたことが知られており、古来、日本人に身近な鳥であったことがうかがえます。その姿が可憐なために、かつては愛玩用に飼育されることもありましたが（もちろん、現在は法律で禁止されています）。



マヒワ♂

越冬中、単独でいることは少なく、ほぼ群を作って行動しています。冬枯れの木の枝にマヒワの群がやってきている光景は、まさしく「鷓色」の花が咲いたかのようです。

◎アトリ *Fringilla montifringilla*

アトリ科 スズメより少し大きい

マヒワとは逆に暖かい色彩がよく目立つアトリ。その名前は、古くは「集鳥」と書いて「あつとり」と読んだものが変化したものだと言われています。そのことが示す通り、群で生活しており、時には数十万羽を越えるような大集団を形成することがあります。かの『古事記』や『日本書紀』にも、「天を覆っ

て飛ぶ」アトリの記述があります。



アトリ♂

そのような大規模な集団は、近年、千葉県ではなかなか見ることができませんが、年によって飛来数の大幅な変動があり、たくさんのアトリが見られる年もあれば、ほとんど見られない年もあります。これは、その夏の繁殖地の環境や餌の量によって左右されているからです。

今回取り上げた4種の小鳥たち、そして千葉県にやってくるその他の多くの冬鳥たちの繁殖地は、ほとんどがユーラシア大陸北部です。手のひらに載せられるほど小さなこの鳥たちは、気候、環境変動、人間の政治経済の動き、時には戦争など、あらゆるものに影響を受けつつ、遠く海を渡って房総半島と繁殖地とを行き来しています。冬鳥たちの姿は、人間の文明や文化と生物多様性とのかかわりという点において、多くのことを私たちに教えてくれます。

(大島 健夫 千葉県生物多様性センター)

生命のにぎわい調査団の 現地研修会を開催しました 令和4年5月28日(土)

今回の研修会は上総湊港海浜公園で浜辺の生き物や地層の観察などを行いました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、検温とアルコール消毒、会話時のマスクの着用を徹底して実施しました。



観察会の様子

当日は5月にしては暑い陽気でしたが、23名の団員にご参加いただきました。研修会では主に以下の3つを観察しました。

○砂浜の生き物・漂着物の観察

一見何もいないように見える砂浜ですが、流れ着いた流木や海藻をめくるとハマトビムシの仲間やオオハサミムシがおり、砂の灰色に溶け込むようにシロチドリの巣と卵があるなど、砂浜にはいろいろな生き物が生活していました。また波打ち際にはたくさんの貝殻が漂着しており、拾い集めると20種を超える種類の貝殻があることがわかりました。



シロチドリの巣と卵

○地層や化石の観察

房総半島は概ね南から北に向かって地層の年代が新しくなっていくのですが、上総湊港海浜公園では、約90万年前の岩坂層と約60万年前の笠森層という、2つの年代の地層を見ることができました。岩坂層は泥や砂が堆積してできたきれいな縞模様が特徴的で、笠森層からは岩の中に埋まった小さな貝類の化石を観察することができました。



地層(岩坂層)

○海浜・崖地の植物の観察

潮風、気温、砂嵐など、海岸は植物にとって厳しい環境ですが、砂浜沿いではハマヒルガオやハマボウフウ、崖地付近ではハマボスやラセイタソウなど、厳しい環境に適応して生きる植物たちを観察することができました。

今回は地層や化石など、今までの研修会ではあまり取り上げてこなかったものを観察することができ、また別の角度から房総半島の魅力を見出すこと

ができたのではないかと思います。次の研修会もみなさまのご参加をお待ちしております。

(村井 貴幸 千葉県生物多様性センター)

生物多様性センターのホームページを リニューアルしました

生物多様性センターのホームページは、当センターでの生物多様性保全に関する取組などを多くの方に伝えるため、平成20年5月に開設しました。同年7月からは、「生命（いのち）のにぎわい調査団」の運用を開始し、調査団員から寄せられる「生き物発見報告」をもとに、生息分布などの情報収集を始めました。

それから約13年、令和4年3月に、使いやすさの向上を目指し、スマートフォン表示にも対応したホームページに全面リニューアルしました。

機能・デザインともに大幅に改良し、「生き物報告フォーム」については、ファイルサイズの大きい動画などの添付を可能にしたことに加え、これまでグーグルマップのリンクで公開していた調査団報告月別一覧をエクセルファイルで掲載することとしました。

また、写真コンテストなどの調査団の活動や、団員から報告のあった生き物の写真を掲載する写真集ページを新たに設置しました。

他にも生物多様性に関する企画や情報、コラムなど様々なものを掲載・更新していますので、初めてご覧になる方もご無沙汰な方も、ぜひ一度新しくなったホームページを覗いてみてください。

新規入団申し込みもweb上で手軽に行えるようになりましたので、みなさまのご入団を心よりお待ちしております。

(小林 遥香 千葉県生物多様性センター)



ホーム画面（左）と生命のにぎわい調査団ページ（右）

千葉県の外来種

イッカククモガニ



撮影・風呂田利夫

イッカククモガニ *Pyromaia tuberculata*は、甲幅が2 cm程度の小型のカニで、甲羅の先端にある1本の棘が名前の由来です。「千葉県の外来生物リスト2020年改訂版」では、影響度D、緊急度Cの外来生物としてリストされています。

本種の原産地は、北米カリフォルニアからパナマ湾にかけての太平洋東岸ですが、現在は世界各地に生息地が拡大しています。自生地以外で最初に記録されたのは1970年の日本で、昭和天皇が神奈川県城ヶ島沖で採集された個体が最初の標本とされています。その後もニュージーランド、オーストラリア、韓国、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチンと分布を広げ、最近では大西洋東岸のポルトガルでも発見されました。日本国内では、青森県から九州にかけての太平洋岸で確認されています。新たな生息地へは、船体内のバラスト水（船の安定を図るための水）によって運ばれたと考えられています。

本種は、国内において、東京湾、伊勢・三河湾、大阪湾など、富栄養化が進み夏季には貧酸素化が著しい内湾において、特に高密度で生息しています。生物にとって過酷な環境下でどのように繁栄することができるのか、その謎を解く詳細な研究が東京湾において行われました。東京湾のイッカククモガニは一年中繁殖しており、プランクトン幼生を継続的に放出できるとともに、着底したカニは3ヶ月で素早く成熟することがわかりました。東京湾の奥部では、夏の間、貧酸素水塊（海水中の酸素が少なく呼吸しにくい海水）が発生し、その水域からはイッカククモガニを含めて生き物の姿が一時的に消えます。秋になって貧酸素水塊が解消された後、湾口部で生まれた本種の幼生が、他の生き物に先んじて着底することで、素早い生息密度の回復を可能としていると考えられます。

私たちの目の前に広がる東京湾の海底で、大繁栄を維持している小さな外来のカニ。駆除の手立は今のところ見当たりませんが、貧酸素水塊の発生しない海に回復させることが唯一の方法かもしれません。

(高山 順子 千葉県立中央博物館)



生物多様性ちばニュースレター No.75 令和4年9月30日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

